

～ 「高・清フレンドリー古道」 ～

第 3 卷－Ⅷ部

烏川流域「柳木沢 観音滝」探査

とても気になっていた烏川流域の「観音滝」を探るべく、2025（R 7）年 10 月 9 日（木）、大沼単独で調査に行ってきた。

その動機は次の図（表）－ 1 による、そのような滝は、今はどんな状況にあるのか。

井場英雄著「岩根沢ものがたり」（岩根沢地区公民館・昭和五十一年十一月三日発行）26 頁より
・・・烏川行人小屋東方を流れて烏川本流に注ぐ「柳木沢」であるということになり、人跡未踏の溪谷を登ること半里ばかり、其の高さ、数丈の断崖絶壁が眼前に立ち塞がり、清涼な滝が懸かりおり、水煙が辺りを暗くし、寄る者の心を自ら尊厳に導くのであった。その道者は一目見るより早く「この所でしたー、夢枕に現れた御滝もそっくりです」と。感涙にむせんで礼拝し悲願を果たした。これが現在の観音滝だといわれている。
図（表）－ 1

岩根沢林道から入り、烏川を 9 時 15 分に出発し、最奥の沢の二股（折返し点）に 10 時 50 分到着した、折返し地点で沢の先を見ると稜線が見えた、この点から上部を観察するに付け、滝があるとは思えなかった。帰途の時間を考慮し 11 時に下った。

この折り返し地点までは約 2.15km であった。その 50m 下部約 2.1km 地点に図－ 2 右上に記載の滝があった。この滝の部分だけは岩（石）が茶褐色の色をしていた。

そこで、上記図（表）－ 1 記述のキーワードと照合・検証する。

「半里」、すなわち、 $3,927.27（1 里）m \div 2 = 1,986.4km$ 実測値は私のジグザク足跡の距離であり、歩き筋の中央部を直線的に結べば、まさに、「半里」と一致する。

「数丈」、 $1 丈 = 3.030303m（約 3 m）$ 、よって数丈とは $\Rightarrow 2 丈 = 2 \times 3.03 = 6.06m、3 丈 = 3 \times 3.03 = 9.09m$ であるが、基点をどこに取るかによるが、長さ（大きさ）はまさに「数丈」と一致する。

ところで、日本において観音（観世御菩薩）信仰は、古くから特に女性に厚く信仰された傾向があるとされていることにおいて、この滝の形状中央部は盛り上がって、見ようによっては墮胎の腹と、女陰の形状がイメージされた。図（表）－ 1 に鑑みて、逆に、このようなことから名称付けしたのだろうと思った。



図-2

他要件と照合する。

この柳木沢流域において、私はどこの場所なのか確認をしていないが、図－3のとおりの手前東側の沢にも滝があるという話もある。

しかし、この沢は尾根までの距離は共に約1km弱で、「半里」には遠く及ばない。

また、図（表）－1において、柳木沢の支流とは書いていない。



【 結 論 】

現地では“もしかしたら、これが観音滝か!?”と直観しながらも、烏川不動滝が脳裏にあって、あのような規模を想定していたことから、 “いや、違うのか!?” という思いもあった。

そこで、帰宅後、再度、「岩根沢ものがたり」を読み込み、図（表）－1の文字の意味合いを確かめ、脳裏に焼き付いた現地の状況と照合する中で、**ここが「観音滝」との確信（確証）を得た。**

『 発展的思考 その1 』

出羽三山において、一般的に語られている昔からの修験者の聖地・秘所としての滝は、「西北」の領域に存在する図－4のとおりのものである。私はいずれにも足を運びお参りしている。

出羽三山 西北ブロック



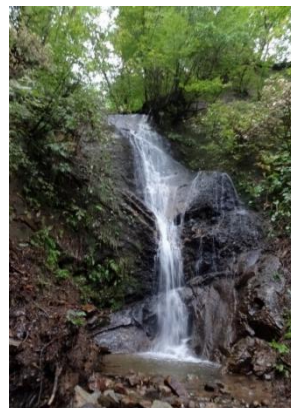
(湯殿山) 仙人沢御滝
空海修行の地

図－4 a



(羽黒山)
須賀の滝

図－4 b



(羽黒山) 阿久谷の滝
能徐太子修行の地

図－4 c

しかし、「東南」領域〔高・清フレンドリー古道〕エリアにおいては、規模、奥深さ、神秘性においては図－4に負けないくらいの図－5のとおりのものである。

私は、図－5 a は遠くから、5 b 近くから遙拝し、5 c は直に肉眼で確かめている。

出羽三山 東南ブロック

『鳥川3滝』



鳥川三階滝

図－5 a



鳥川不動滝

図－5 b



鳥川観音滝

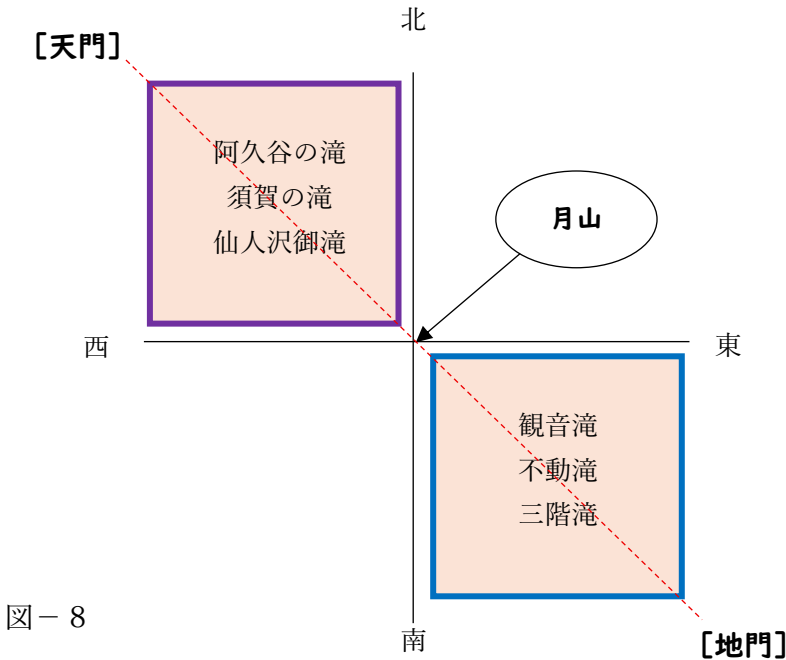
図－5 c

これら6個所の位置を地形図上にプロットすると図－6のとおりである。

鳥川3滝を他と対比させるために、月山を中心に、湯殿山仙人沢御滝を概略的に西北（北西）エリアに入れた。

陰陽道や修験道における方位観について、西北－東南のラインは方位上で特別な意味を持つ線の一つである。前者は「天地の気を乱さぬための門」と捉え、後者は「天地の霊を結ぶための門」と捉え、双方で捉え方は少し違うが、修験道との係りについて ChatGPT を参考に図(表)－7 にまとめた。

――	天 門	地 門
方位	北西（乾 ^{けん} の方）	南東（巽 ^{そん} の方）
意味合い	天界・神々への通路（天の修法）	地界・地蔵界への通路（地の修法）
	天の気の出入り口	地の気の出入り口
	天上界、仏の世界への到達点	地上界、現世・迷いからの出発点
修法上の扱い	「天門を開く」＝天上の加護を請う儀式	「地門を開く」＝地霊・祖霊を鎮める儀式
総体	天・地の間を自由往来・精通し、「もの・こと」の陰陽二元的対立を超越した世界を追求（希求）する思想確立を目指す。	
図(表)－7		



図－8

そこで、出羽三山に係り取り上げた当該6個所の滝をデフォルメ化（イメージ化）すると、図－8のとおりとなる、天門対応ブロックと、地門対応ブロックと見做すことにより、両ブロック、ひいては、6滝の結合的必然性が見えて来る。

須賀の滝は普通の観光客姿でお参り可である、阿久谷と仙人沢御滝は秘所であり、至る道は明瞭ではないが、その気になれば比較的容易に行くことは可である。

しかし、烏川の観音滝・不動滝・三階滝は、普通の人にとっては容易ならざるが、沢登りをやっている者にとっては、容易な場所であろう。世には冒険心の強い勇者が沢山いるはず、是非とも、挑戦したまえ！そして、その3滝で培った（授かった）霊力を、回向の文「願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道」の精神を以って、私達に幸せの種を振り撒いて欲しいものである。

山形新聞社は、例年、図－9 のとおりの山岳縦走、あるいは、秘所等の探査を通して山の魅力を取材し、また、取材者のチームワークを伝えてくれている。この内容に登山愛好者のみならず多くの読者が吾ながらにして（吾が体験のこととして）その感動を味わっているだろう。そこで、「高・清フレンドリー古道」領域の取材を提案したいと考えている。

すると、吾が身内においては、あるいは、一般の人は “朝日や飯豊のように縦走にはならない” という自虐的・懐疑的な見方もある。

しかし、待てよ。



図－9



図－10

図－10 は 2025(R7)年 10 月 5 日（日）～7 日（火）にかけての鳥海山山行きルポ記事である。見どころスポットを訪ねての山行きである。鳥海山は独立峰であるから朝日や飯豊のように縦走という形態にはならないだろう、しかし、このような対応もある。

天門対応ブロック（阿久谷の滝、須賀の滝、仙人沢御滝）については、現実の修行地の地（出羽三山神社、正善院）ということで、行き難いだろうが、ならば、吾が高・清フレンドリー古道域においてはそのような規制的制約はない。従来関心が及ばなかったエリアの知られざるスポット、深秘な見どころスポットを訪ねるというのは新しい取組みとなるのではないだろうか。

図(表)－11 を参照、この地門対応ブロックの滝は、「第3巻－IV部 鳥川不動滝×秘連古道」に記述したとおりに信仰の対象であり、かつ、「第3巻－I部 山師（鉦山師や鉦夫）の熱い視線」に記述したとおりに鉦山開発の対象域であったのである。硬軟の硬すなわち鉦山開発と硬軟の軟すなわち信仰、そして、文武両面の文・精神性すなわち信仰と武・実利性すなわち鉦山開発の両面を内包している。いわば、対極的要素とその双方の魅力を包含したポテンシャルが高いと認識している。

つについては、山形新聞に提案していきたい。

		注目的(魅力的)要素	
		信仰	鉦山開発
対極的要素	硬軟	軟	硬
	文武両面	文	武
	精神性と実利性	精神性	実利性

図(表)－11

(end)